

前号に書かせてもらった様に、私は凡そ40年前に木更津貝淵で富士食品を創業して再出発しました。それだけに今でも貝淵、新田あたりは苦労の思い出があり、振り返れば懐かしい人生のふるさとでもあります。

今でも時々市内に車を捨てて、まだ人の温かみが残っている宵の裏町を歩くことがあります。木更津にもこんな裏通りがあったのかと立ち止まる風景があります。その一つに、数年前「将基面」と言う大変珍しい表札と出会いました。

その後小説「戦艦大和」等で知られる吉村昭の短編「遠い幻想」の中の「梅の蕾」を読み、主人公「堂前医師」が木更津の「将基面」さんである事を知りました。その後ご本人も「無医村に花は微笑む」を刊行され、テレビドラマとなって多くの方が知る様になりました。

将基面先生は、医師としては病人を治す医師ではなく、病人のいない村を目指して無医村田野畑村へ赴任したのであります。この先生のすばらしかったことは、医師としてだけでなく、早野村長を助けて「村おこし」に尽力された事でもあります。

田野畑村は三陸海岸の孤島と言われた隔絶された村で、人口5千人足らずの県下でもっとも貧しい村でした。

将基面先生は、この村おこしは外から企業誘致しないで、村が持つ美しい海・野・畑・山を生かして村人たちが山菜、野菜を作り、牛を飼い、牧草地を開き、牛乳精製所を設け、自前の漁港を作り村営の旅館、ホテルを建設し、さては三陸の雄大な海岸線観光用の観光船を購入、さては近隣町村を説得して海岸で電車を走らせたのであります。

清和およそ3千人、小糸およそ9千人、亀山松丘5千人、小櫃6千人であります。私たちの地域は首都圏の恵まれた位置にあります。

かつて「旅する巨人」で知られる宮本常一氏は、74歳で亡くなるまで全国16万キロを歩いて離島、村おこしに努力されました。

地震前の新潟県山古志村も宮本さんが生前何年間か、住み込みで作られた村であります。

この宮本さんもまた村づくりは外から企業誘致をしないで、大自然に恵まれた村を「箱庭の様」に見える美しい村にしよう！そして湧き出るきれいな水、山、畑、田を使って日本一美味しい農産物を作り、村中がおいしい料理を食べよう！鯉を殖し、牛を育てよう！と提案し、先ず山古志村の人々が豊かな暮らしを作れば世間の見る目も変わる。観光用には花だけでなく、実のなる観木を植えよう！そうすれば鳥や獣も集まってくる…と解いて、他に頼ることなく、お互いに村が助け合うことで豊かな村を作ったのでした。

先日まで産経新聞に「晴れた日は里笛吹いて」を連載した岡進さんは、私の古い友人で「君津市では「猿と猪」の被害が多くて困る」と話したら「猿には羊を飼いなさい。猪にも羊、そのほかに牛と豚を放牧することです」と答えが返ってきました。

早速インターネットで調べますとまさに同じ答えが出てきました。

君津には上総堀りの湧き水が小糸川流域だけで950ヶ所、小高い山を森、林、広がる田畑、川と湖…今、全国でこうした村々へと人々が移住し始めました。団塊世代の移動が始まったのでしょうか。